

その他

日本人看護師の外国人患者対応力向上に向けた 実践的課題探究の取り組み

Exploring practical challenges to improve the abilities of Japanese nurses to effectively respond to foreign patients

谷本真理子 山崎千寿子 本谷園子 高山裕子
中山純果 今泉一哉 飯田恭子 相馬泰子

Mariko TANIMOTO, Chizuko YAMAZAKI, Sonoko MOTOTANI, Yuko TAKAYAMA
Junka NAKAYAMA, Kazuya IMAIZUMI, Yasuko IIDA, Yasuko SOMA



東京医療保健大学
TOKYO HEALTHCARE UNIVERSITY

〈その他〉

日本人看護師の外国人患者対応力向上に向けた実践的課題探究の取り組み

Exploring practical challenges to improve the abilities of Japanese nurses to effectively respond to foreign patients

谷本真理子¹ 山崎千寿子¹ 本谷園子² 高山裕子¹
中山純果¹ 今泉一哉³ 飯田恭子² 相馬泰子⁴

1 東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科

2 東京医療保健大学 大学院医療保健学研究科

3 東京医療保健大学 医療保健学部 医療情報学科

4 NTT東日本関東病院 看護部

Mariko TANIMOTO, Chizuko YAMAZAKI, Sonoko MOTOTANI, Yuko TAKAYAMA

Junka NAKAYAMA, Kazuya IMAIZUMI, Yasuko IIDA, Yasuko SOMA

1 Tokyo Healthcare University, Faculty of Healthcare, Division of Nursing

2 Tokyo Healthcare University, Postgraduate School

3 Tokyo Healthcare University, Faculty of Healthcare, Division of Healthcare Informatics

4 NTT Medical Center Tokyo

要 旨：今後さらに外国人が増加する日本において、日本人看護師の外国人患者対応力を向上させることが必要である。本学医療保健学部看護学科では学際メンバーと提携病院看護部との協働により、臨床看護職の外国人患者対応力向上に向けた課題の検討を行った。文献検討、提携病院看護師からの情報提供、外国人の視点をからの情報収集、外国人の視点を交えた学際メンバーとの意見交換会を通して以下の結論を得た。日本の医療ケアの場において、外国人患者が日本人患者と同じように医療ケアニーズの満足を得ることができるためには、日本人看護師の外国人患者への対応力を向上させることが必要である。そのための実践的課題としては、①外国人患者に対して身構え過ぎない・気負わないマインドセット、②専門分野における重要なキーワード（治療ケアの選択肢となる専門用語など）の当該外国語による習得、③医療ケアにおける自文化および異文化の理解などが考えられた。これらの課題を達成したうえで外国人患者を慮る日本文化的ケアが実践できれば、日本人看護師のやりがいにもつながる可能性がある。

キーワード：日本人看護師、外国人患者、実践的課題、外国語

Keywords：

I. はじめに

日本は少子高齢化の進行により日本人労働者は今後とも減少する。2019年4月からは、改正出入国管理法が施行され、今後は日本社会における外国人生活者が増加することから、医療ケアを担う日本人看護師の外国人患者対応力を高める必要がある。看護実践とは、人間の健康と安寧を支える専門職の実践である。そのた

め、看護職が国籍を問わず一人ひとりの文化的価値を尊重して多様性に対応できる看護実践能力を高めることが必要である。そこで、2018年本学医療保健学部看護学科では、看護職の外国人患者対応力向上に取り組むプロジェクトチーム（グローバルナース育成開発プロジェクト；以下GNP）を立ち上げ、本学提携病院看護部との協働、ならびに学際チームの結成により取り組んだ。

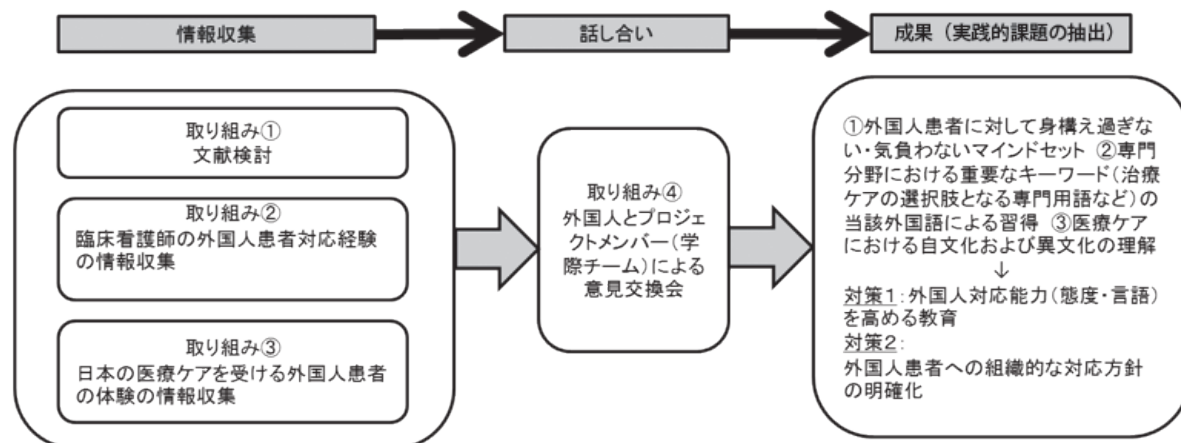


図1 2018年度 GNP 活動の構造と成果

先行研究では、日本の医療現場において看護師が問題ととらえているのは多くがコミュニケーションの問題であり¹⁾²⁾、日本人看護職の文化的対応能力は諸外国に比べて低いことが明らかにされている²⁾。また、寺岡ら³⁾は、外国人患者の視点から、日本の医療を受ける外国人の異文化体験として、言語の壁、先入観の壁、異文化が理解されないことを明らかにした。これらのことから、日本の医療ケアの場において、外国人患者、日本人看護師の双方にとって言語の壁と異文化理解が難しいという課題はあるが、日々の医療ケアの実践においてどのようにして看護師の外国人対応力を高めるのかを具体的に明らかにしているものは見られなかった。

そこで2018年度、GNPでは日本人看護師の外国人患者対応力向上に向けた課題の探究を、①文献検討、②臨床看護師の外国人対応経験の情報収集、③日本の医療ケアを受ける外国人患者の経験の情報収集を行い、④プロジェクトメンバーと外国人の見方を交えた意見交換会を通して課題検討を行った。以下にその活動内容と得られた成果について報告する（図1）。

なお、本取り組みにおける「外国人患者」とは、日本語以外を母国語とする海外から移住した日本国内在住者や海外からの観光客で、健康問題により日本で医療を受療する者、とする。

II. 活動の実際

1. 取り組み①文献検討

目的：先行研究から外国人患者対応について焦点が
あたる場や状況、看護師等のスタッフの困難
を把握する。

1) 検索方法：医学中央雑誌Web版を用いて検索を行った。検索期間は、2009年から2019年とした（検索年月日 2019年1月17日）。キーワードを、「外国人患者」and「病院」、「外国人患者」and「看護師」で検索し、「抄録あり」で絞り込み検索を行った。

2) 除外基準

重複論文を除外し、論説、患者対応に関する臨床看護実践に関連が薄いと考えられた論文を除外した。

3) 分析：論文の種類を分別し、各論文で焦点となっている場と対象特性、医療ケアスタッフの困難を抽出する。

4) 結果：データベースから103件の論文が抽出された。重複文献25件、メディカルツーリズム、診療受け入れ実態調査、旅行後の診察、治療評価、海外視察に関する論文20件を除外し、58件の論文を選定した（資料）。

58件の論文は、看護師や患者の意識調査、通

表1 論文の目的別分類（論文数 58）

種類	論文数	文献番号
実態調査 （看護師、患者、通訳・受療相談事業、受療実態など）	24	2,6,8,11,15,17,23,26,29,32,35,37,38,39,43,45,47,48,49,51,52,56,57,58
看護実践事例報告	13	4,5,7,12,14,19,24,30,33,34,36,41,44
教材・システム・コミュニケーションツール開発	12	1,9,10,13,18,20,21,22,27,28,31,42
実践報告（大学、自治体、病院など）	6	16,25,46,53,54,55
介入比較試験	1	3
文献レビュー	2	40,50

表2 場・対象特性に応じた課題 (58論文17件)

場・対象特性	課題	論文数	文献番号
精神科	コミュニケーションの方法	7	14,19,23,30,33,38,44
周手術期	不安への対応、身体への露出などへの文化的価値観の相違	3	7,24,29
外来（セルフケア・家族支援）	生活習慣・様式の相違、治療ガイドラインの相違	2	3,34
救急外来	インフォームドコンセント、家族連絡、医療体制、医療費、保険	1	26
周産期	言語、出産に関する文化的価値観、制度や経済的問題	1	39
結核（隔離）	治療ガイドラインの相違	1	17
重症末期患者	高度治療の継続に関する医療継続、帰国の支援	1	12
小児	異国での入院治療の母親のストレス	1	41

訳・受療相談事業実態調査、受療状況調査などの実態調査が24件、看護実践事例報告が13件、教材・対応システム・コミュニケーションツール開発報告が12件、大学や自治体、病院など組織的取り組みの報告が6件、看護師を対象とした英語教育介入比較試験が1件、文献レビューが2件であった（表1）。

医療ケアの場や対象特性に応じた課題について言及された論文は58件中17件あった。精神科が最も多く7件、次いで周手術期が3件、外来が2件であった。課題には、コミュニケーションの方法、不安への対応、生活習慣や文化的価値の相違、治療ガイドラインや医療体制の相違、経済的問題、などが挙げられた（表2）。

次に、臨床現場における医療ケアスタッフの困難について調べた論文は58件中6件あり、スタッフが困難と感じる事由について取り出した。言語の問題が共通して挙げられていたが、看護師の困難には飲食制限や早期離床に従わない、退院後の

予約をしない、といった臨床場面で見守る看護師が困る外国人患者の行動が含まれた（表3）。

2. 取り組み②：臨床看護師の立場からの情報収集

目的：日本の臨床看護師の外国人患者対応経験から課題を探る

本学連携病院の臨床看護師に、本プロジェクトを紹介し、関心をもって主体的に参加した14名より臨床での外国人対応のケア実践状況について情報を得た。プロジェクトメンバーが作成した外国人患者対応場面のイラスト資料を提示して外国人対応を想起してもらった上で、今までの外国人患者への対応経験、外国人対応のために身に着けたい力について話を聞いた。看護師2～5名のグループで行った。情報収集期間は2019年1月28日～2月1日であった。語られた内容は以下の通りである。

臨床看護師は、外国人患者に対する対応では、言語が一番の課題であった。しかし、所属病院は外国人患者受け入れ医療機関（以下、JMIP）の認証取得病院であることから常備されている翻訳機や常駐

表3 医療ケアの場における困難 (58論文6件)

困難の主体	困難の内容	論文数	文献番号
看護師の困難	・言語の問題 ・文化・生活習慣が異なる ・家族への連絡 ・検査やケアが十分に説明できない、理解されない ・医療制度や経済的問題による介入困難 ・飲食制限や早期離床に従わない ・退院後の予約をしない ・食事療法が困難 ・治療ガイドラインが異なる ・母国帰国後の継続医療困難(保険医療制度相違) ・ストレス誘発症状への対応	4	2,8,26,40
外国人の困難	・言語の問題 ・文化・生活習慣の相違 ・医療制度の相違 ・医療費が払えない（医療保険の加入がない）	3	4,40,49
病院職員の困難	・対応できる体制の整備が不十分 ・外国人対応学習不足	1	40

する通訳者を介して対応していた。特に、医療の提供内容が比較的決まっている部署（産科や外科、予約外来など）や、治療内容の意思決定がなされている場合には事前に対応の準備ができるとのことだった。また、直接患者に看護を行う場面では、日本語を話せる家族に通訳してもらい、説明内容を事前に翻訳して準備をする、等の方法により対応を行っていた。

通訳者や翻訳ツールでは対応が難しい場面があることも語られた。具体的には、通訳者の感情や解釈、意見などが入っている、もしくは医療の知識が十分ではないと思われる、機械翻訳の妥当性及精度に疑問を感じるということであった。また、臨床看護師が日常のケア場面で使う日本語のニュアンスが翻訳機械を介しては伝えられない、具体的には「ずきずき」「きりきり」など痛みの性質、化学療法中や終末期にある患者や家族に対する心理面への声かけ、お悔やみやいたわりの言葉をどのように伝えるかが難しいとのことだった。

また、臨床看護師自身に言語の壁があることで外国人患者に対して日本人患者に対応する時と同じように振る舞えないもどかしさ、看護できていないと思うが諦めているという気持ちも語られた。いつもなら当たり前で伝える言葉が出てこないことや、退院指導や化学療法を受ける患者や家族に生活や心理面や治療の理解を確認したくても、一歩踏み込んで聞くことができないと語られた。また、生活文化や宗教により患者の価値観が異なっていることを理解はしても具体的に目の前の患者の文化を知らないことで、自分のケアが患者に適していたかどうかの評価ができないと語られた。

他に、外国語を上手く話せないこと、発音を周囲の日本人に聞かれることは恥ずかしく、あえて外国人患者にかかわらないことも語られた。また、言葉がスムーズに出ないこと、完璧に準備して話さないと外国人患者に対して失礼ではないかと思うといった相手を慮る気持ちや気負いも語られた。しかし、他のスタッフが片言でも積極的に外国人患者とかわろうとしている姿をみると自分もやってみようと思うといった気持ちも語られた。

3. 取り組み③：外国人患者の立場からの情報収集

目的：日本で医療ケアを受ける外国人患者と家族の経験から課題を探る。

日本における医療ケアを受ける外国人患者と家族の経験について話ができる講演者として、医療通訳者であるカブレホス・セサル氏（ランゲージワン株式会社社員、在日期間約30年の日系ペルー人でポ

ルトガル語圏医療通訳担当、以下セサル氏）を招へいし、本学教職員、学生、近隣病院看護師を対象に、講演会を開催した。講演会テーマは「医療ケアを受ける外国人患者と家族の体験」とし、外国人患者と家族が日本で病院を利用をした際の困惑や困難などを象徴する事例を紹介いただけるように依頼した。開催日時は、2019年3月18日（月）の1時間半であった。

最初にGNP代表の谷本より「企画趣旨の説明」、相馬より「NTT東日本関東病院における外国人患者の状況と対応方法の紹介」を行った後、セサル氏より「日本における外国人患者と家族の体験」について、実際に通訳に入った事例を交えて約1時間ご講演いただいた。具体的には、痛みの強い外国人患者の外来受診事例、がんの摘出術が必要となった事例、旅行中の救急外来受診事例、産婦人科外来や小児科外来、などの事例をもとに、婦人科内診室の目隠し用カーテンをはじめとする病院内仕様に対する文化的違和感や、保険制度の違いや医療スタッフの態度によって受ける外国人の心象、独特な日本人の会話を通訳するときの難しさなどが紹介された。

参加者のアンケート結果は以下のとおりであった。

講演会の参加者は51名、GNPメンバー以外の参加者43名（うち、教員24名、職員3名、学生5名、院生1名、NTT看護師3名、その他7名）であった。このうち、26名からアンケート回答を回収、無記入1を除き、25件を集計した。無記入1名を除く24名全員が「大変満足」「満足」と回答。「日本との文化や医療の違いを再認識できた」「臨床で感じていた壁が文化の違いと改めて認識した」などの理由が挙げられた。アンケートに記載された質問の「突然亡くなった時の対応」、「災害時の対応」は、セサル氏からも対策が必要であるとのコメントがあった。

4. 取り組み④外国人とプロジェクトメンバー（学際チーム）による意見交換会

目的：外国人の見方当事者（外国人）の見方を交えて、課題を明確化する

日本の医療ケアの場における外国人患者対応に関する課題についての意見交換会を2019年3月19日に180分にわたり実施した。参加者：セサル氏、プロジェクトメンバーからは、谷本・山崎（看護学）、今泉（人間工学）、飯田（言語学）、本谷（医療経済学）であった。意見交換会は、先に行った文献検討や看護師からの情報提供、講演会を踏まえて、それぞれが意見を自由に述べ合う形式で実施した。意見

表 4 セサル氏とプロジェクトメンバーによる意見交換会の内容

■看護師の外国人対応の必要性について
 【治療の場での誤解を招く恐れによるかわり回避の心理】
 ・知っている単語で不安く使った英語が間違っていると医療の場面では誤解を生んで責任問題になる可能性があり、これはできるだけ外国人対応を回避するという心理につながるため対策が必要。
 【通訳を入れた説明場面での誤訳監視の必要性】
 ・医師の説明場面に通訳を入れたとしても、そのやりとりをチェックできる程度に専門的な言葉などを聞き取れる、実践の場での基本的語学力を看護師はつける必要がある。
 【不利益が生じる可能性がある場面での機械翻訳の限界と人間による対応の必要性】
 ・会計や最初の問診などは機械翻訳でもできるが患者に不利益が生じる可能性がある選択の場面では、間に人間が入る必要がある。相手が何を理解し、何を理解していないかを見極めていくこと、相手が聞きたいことを十分に聞けるように環境と状況を作る必要がある。
 ■日本で医療ケアを受ける外国人患者のニーズについて
 【日本人看護師はい一般的には優しく、技術うまい人がとてもよい】
 日本人看護師は、ペルーに比べるととても優しくうれしいが、注射や採血などの技術が上手い人はとても印象のこる。
 【異国で生活している外国人患者のストレス反応】
 ・在日外国人が医療を受ける場面では、母国とは異なる文化における生活により蓄積していたストレスが吐き出され、様々な訴え、感情が吐露されることがある。
 【医療者が迷・不安な態度がもたらす外国人患者の不安】
 ・在日外国人の医療保険の範囲を勘案しながら必要な検査処置を絞り込むとき、医師が悩ましくしている様子は、言葉を介さずとも外国人に大丈夫か？と不安にさせる。
 【外国人患者は個々の文化的背景を理解する必要性】
 ・日本では、ペルー・フィリピンなどの患者を同室に入れて日本人とは別にするなど、国人患者対日本人患者という部屋割りの仕方は外国人の個々異なる文化を理解してほしいと感じる。
 ・異性に積極的な文化的背景のある患者の場合、気に入った看護師を呼び出してスキンシップを求めてくることもあり、うまく対応できるようにする必要があり、嫌な気持ちになったり我慢を強いられることにもなったり、自分の態度を反省するといったようなことが起こる。
 【通訳を入れたケアチームが必要な患者】
 ・精神科などでは、通訳も一人の通訳で固定しないと対応が難しい。個別的な対応を必要とする患者や状況では看護師と通訳をケアチームにのけるとよい。
 ■日本的コミュニケーション・ケア態度の利点欠点について
 【日本人の会話のわかりにくさ】
 ・日本語は文の最後に否定がくると、わかりにくい。オブラートに包んだような話し方、遠回しな言い方は外国人にとってわかりにくい。
 ・日本ではわかっているのに「分かった」と言ったり、共感したようなそぶりをするなどがあり、このような対応は外国人患者に誤解を招き危険があり、失礼でもある。
 【日本人看護師が自文化の特性を自覚する必要性】
 ・日本の看護師は、優しく、さりげなく対応し、相手を察し、慮っていくことを美徳としている。日本の文化的ケアとして評価できる一方で、相手に確認せずに看護師が自分の態度を反省しているだけになつた、外国人患者には伝わらず、尊重したことにはならない。
 ・日本の看護師は（海外に比べて）優しいのはうれしいが、伝えたことが他の看護師にも伝わって共有されていないと、理解されたと感じない。
 【外国語を用いた日本的ケア実践へのハードル】
 ・さりげなく、察して、言葉を選んで配慮して、という日本人看護師のケアのスタイルを外国語で表現していくとそれは難易度の高いこと。
 ■外国人患者の理解を支えることについて
 【外国人が自分で調べられるキーワードを伝える意義】
 ・治療や検査の選択する状況では、外国人患者と家族に必要なキーワードを伝えるとよい。外国人がそのキーワードを頼りにインターネットを使い、母国語で調べることができる。
 【外国人患者の関心・理解不足の内容を知る必要性】
 ・日本の文化が分からない外国人であるがゆえ、どこが分からないかをうまく引き出し、理解していくことが必要、必要な情報は加えて、求めていることを理解して発展させていくことが大切。
 ・患者が線がえし使う単語・ワードを聞き取り、患者の関心、注意を聞き取る、確認し、理解の内容、程度を把握すること、通訳も活用してチームで行っていくことができるとよい。
 ■医療ケアの場におけるトラブルについて
 【お金が絡む場面で生じるトラブル】
 ・給食を知らず検査ができなかった検査支払い請求をするときなど、「言った」「聞いていない」といったトラブルにつながる可能性がある。特に高額な検査では医療通訳をいれる必要がある。
 ■医療ケアの場の体制整備について
 【外国人患者対応を進めるための状況の整理と対応策の準備】
 ・ルチンの事などは機械的な翻訳で対応に問題がないが、人生に影響が大きい意思決定を要する状況では、通訳者が入らないといけない。これを整理していけば、現場で看護師も恐れることなく外国人と関わるができる。
 【治療の重要な情報の誤伝達によるリスク予防】
 ・言葉が異なる人同士では、楽しそうにしているでも細かいことは伝わっていない。重要な医療の場面で、ちょっと言語ができるスタッフで対応をすませてしまうことは危険である。
 ・医師との間に入った通訳者が間違っている言葉にしているか、看護師は聞き取る努力をしていくことは必要。命、誤解、トラブルにつながるように、専門用語は聞き取れるようにリスニングでできる能力をつけていくことは必要。
 ・通訳を入れたとしても、日常の医療ケアのことをそもそも分かりやすく日本人に対してさえも伝えているか、を点検することは誤訳を予防する上でも重要。
 【病院組織全体での取り組みの必要性】
 ・日本の病院ではまだまだ外国人対応に具体的に取組んでいない現状もあると思われる。病院の体制として、どのあたりはできるようになるように頑張してほしいとラインをひき、個々人が自分の目標をおいていく、ことも必要となる。

交換の内容は参加者全員の承諾を得て録音し、逐語録を作成して内容を整理した。意見交換がされた内容は、看護師の外国人対応について、外国人患者のニーズについて、日本的コミュニケーション、ケア態度の利点欠点について、外国人患者の理解を支えることについて、医療ケアの場におけるトラブルについて、医療ケアの場の体制整備について、であつた（表 4）。

Ⅲ. 考察

外国人患者に対する看護師の対応に関する文献は、実態調査と事例報告が多くを占め、研究の蓄積が少ないことが明らかとなった。そのうち、場や対象特性に応じた課題について言及した論文は 17 件であった。精神科領域が 7 件と最も多く、言語的文化的理解の必要性が高いと対応が困難であることが推察された。医療ケアの場における困難内容を調べた論文は 6 件で、言葉の問題のほか、経済面や医療制度の相違、文化的価値観の相違が挙げられていた。このうち、術後の早期離床に従わない、退院後の外来受診の予約をいれないといった、日本で当たり前のことが外国人患者に受け入れられない状況が困難として挙げられていた。一方で、外国人患者は、日本人と外国人を区別した部屋割

りにされることで文化が理解されていないと感じることや、婦人科内診室での目隠し用カーテンは見えないことで恐怖であることなどがセサル氏との意見交換で指摘され、患者に配慮したつもりでの対応・設備がむしろ違和感と受け取られることも確認できた。文化的な違和感は、自文化との相違によって感じられるものといえる。今後はさらに多様化する外国人患者への対応能力を高めるためには、日本の医療ケアの自文化理解を深めることも必要であると考えられた。

臨床看護師からは、治療を補助する際は翻訳機や通訳者の配置があれば対応可能であるが、機械翻訳や通訳者による翻訳内容の的確さへの疑問、外国人患者の反応を解釈できないことによるケア評価困難といったケア実践上の課題があった。さらに、相手の文化の知識不足や普段と同じように振る舞えないといった心理的距離感、上手くない英語を話すことでの周囲の視線が気になるといった心理的抵抗感が述べられた。このような心理的抵抗感を緩和してケア実践を一步すすめることができるアプローチを検討する必要性が示唆された。

セサル氏の講演及び意見交換会では、費用がかかる治療検査の説明は十分に相手の理解を得ないと金銭的なトラブルにつながることや、患者の人生に大きく影響する治療の意思決定の場面では、翻訳機や片言の外

国語での対応ではなく適任者（通訳者など）が介入する必要があると指摘された。例えば、生命危機対応時、個人の人生に影響を及ぼす治療の意思決定や看取り前後、個性の高い精神科医療といった人と人との対応が必要な状況では通訳を介すること、予定入院や検査など標準化された治療の進行では翻訳機などを駆使して誰もが対応できるようにする、等、外国人患者の医療ケアニーズを満たすための、状況に応じた言語対応策を検討し対応システムを整えることが求められる。

また、医療ケアニーズへの対応という点からは、外国人患者に必要な情報が確実に伝わるよう、通訳者に対しても相手が理解しやすい日本語を話すといった基本的な言葉遣いの意識を持つことも必要であろう。そして、所属部署でよく用いられる外国語の語彙を知っておくことは必要であり、そうすれば通訳を介する状況においてもその内容がある程度追認していくことも可能になる。

昨今、外国人患者の対応経験と異文化間感受性と看護能力の関連に着目した研究⁴⁾も発表されるなど、今後、日本の医療ケア施設の現場で外国人患者への対応はますます重要となってくるとされる。臨床看護師の異文化対応への関心が高まるような外国人患者に対する実践経験の積み重ねが大切である。まずは、世界共通言語である英語を使った実践的なコミュニケーション技術高めるとともに、異文化理解と自文化理解が深まるような教育プログラムを開発する必要がある。そのうえで、患者を慮る日本文化的な看護を提供できるようになれば、日本人看護師のやりがいにもつながる可能性がある。以上より、医療ケアの場において外国人患者が日本人患者と同じように医療ケアの満足を得ることができるための実践的課題として、以下の2項目を挙げた。

対策1：外国人対応能力（態度・言語）を高める教育

- ① 医療ケアにおける自文化理解と異文化理解
各文化圏の特徴を各種HPや書物、患者の話を聞いて学ぶ、自文化（医療ケアの特徴、日本文化的対応の特性）を理解し、無意識の行為への気づきを高める、等。
- ② 医療ケアに関する言語の実践基礎力の強化
医療ケアの場での外国人患者との会話のやりとりに参加できるようになるための、言語の実践基礎力を強化する（所属領域における専門用語の語彙、キーワードを学習する、所属領域における専門用語の語彙、キーワードをききとれる）、等。

対策2：外国人患者への組織的な対応方針の明確化

組織的な外国語能力対応能力向上の方針の明確化、医療ケアの状況別に求められる言語的対応策の整理と可視化。

IV. 終わりに

今回のプロジェクトでご協力をいただいた臨床看護師の方々は、外国人患者受け入れ体制が整備された1つの病院における外国人患者対応に関心ある看護師であった。今後は看護師のニーズを広く把握するとともに、外国語対応能力の向上をはかる尺度や教育プログラムを開発していきたい。

本プロジェクトに多大なるご協力いただいたセサル氏、ご協力をいただきましたNTT東日本関東病院の看護部、ランゲージワン株式会社の高橋様に深く御礼を申し上げます。

本取り組みは、2018年度東京医療保健大学学長裁量経費を受けた。

セサル氏および提携病院看護部には内容の確認と本学紀要記載の承諾を得た。

引用文献

- 1) 安達由希子、小川美奈子、佐竹紀子、他. 外国人患者のケアに関する公立病院の調査、大阪大学看護学雑誌 2009; 15 (1) : 19-31.
- 2) 野地有子. アジア圏における看護職の文化的能力の評価と能力開発・臨床応用に関する国際比較研究 科学研究費助成事業研究成果報告書 2017<https://kaken.nii.ac.jp/ja/report/KAKENHI-PROJECT-25253107/25253107seika/> (2019.4.28)
- 3) 寺岡三左子、村中陽子. 在日外国人が実感した日本の医療における異文化体験の様相 日本看護科学学会誌 2017; 37: 35-44.
- 4) 戸田登美子、丸光恵、吉原未佳. 外国人患者の対応経験と異文化間感受性及び看護能力との関連、国際保健医療 2018; 33 (3) : 266.

資料 選定論文一覧（発行年代順）

【2009】

1. 宮部真衣、他. 外国人患者のための用例対訳を用いた多言語医療受付支援システムの構築. 電子情報通信学会論文誌 D : 情報・システム 92 (6) : 708-718.
2. 安達由希子、他. 外国人患者のケアに関する公立病院の調査. 大阪大学看護学雑誌 15 (1) : 19-31.

【2010】

3. 長松康子, 他. Compliance with Ophthalmology Outpatient Treatment Comparing Japanese and Foreign Patients in Tokyo. 聖路加看護学会誌 14 (1) : 9-16.
4. 井上由紀江, 他. 異国で入院となった患者の心理を知る 外国人患者が安心できる援助をめざして. 市立千歳市民病院医誌 6 (1) : 51-53.
5. 小宮山美穂子. 外国人患者に対する看護 特にコミュニケーションについて. 相澤病院医学雑誌 7 別冊 : 61-63.
6. 野中千春, 他. 在日外国人患者と看護師との関係構築プロセスに関する研究. 国際保健医療 25 (1) : 21-32.
7. 川村 浩美. 自分の意思が上手に伝えられない外国人患者への術前訪問でのコミュニケーションについて. 川崎市立川崎病院事例研究集録 12 回 81-84.

【2011】

8. Maeno Mami, 他. Japanese Nurses' Views of Perioperative Management of Foreign Patients in Osaka. 国際保健医療 26 (4) : 273-280.
9. 長谷川旭, 他. モバイル情報端末で利用する多言語医療支援システムの開発. 社会医学研究 29 (1) : 39-45.
10. 長嶺めぐみ, 他. 医療従事者の立場から見た遠隔医療通訳サービスの有用性. 日本遠隔医療学会雑誌 7 (2) : 128-131.
11. 前野真由美, 他. 外国語で受診できる診療所の言語の問題と期待される支援. 静岡県立大学短期大学部研究紀要 24 : 13-26.
12. 福田実, 他. 国際観光船乗客に発症した肺癌症例の経験. 長崎医学会雑誌 86 (2) : 59-63.
13. 高木範子, 他. 臨床看護英会話学習用 DVD 教材の開発とその効果の検証 クリニックの受付編. 日本医学看護学教育学会誌 20 : 27-32.

【2012】

14. 東玲子, 他. 言葉が通じない外国人患者への看護. 日本精神科看護学術集会誌 55 (1) : 466-467.
15. 山田宏毅, 他. 当院における整形外科外国人患者の診療の実態と問題点. 中部日本整形外科災害外科学会雑誌 55 (6) : 1303-1304.
16. 旗本恵介. 民間医療サービスを通じたサハリンからの外国人患者の受け入れ. 日本航空医療学会雑誌 13 (1) : 15-18.

【2013】

17. 酒井美枝, 他. 外国人患者の結核に対する認識と療養生活上の思いについて. 中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究学会誌 8 : 17-19.
18. 井田健, 他. 滋賀県多言語医療通訳ネットワークの実績と今後の展望. 公立甲賀病院紀要 16 : 17-22.

19. 山田利宝. 相手を理解することの大切さ 外国人患者とのコミュニケーションを通じて. 日本精神科看護学術集会誌 56 (2) : 221-225.
20. 長谷川聡, 他. 本当に使えるアプリはあるか 情報伝達支援のための効果を示す 看護師向け多言語会話アプリ『EXLanguage Nurse』の利用と発展. 新医療 40 (8) : 120-124.
21. 瀧澤清美. 本当に使えるアプリはあるか 情報伝達支援のための効果を示す 多言語医療支援システムの研究開発. 新医療 40 (8) : 125-127.

【2014】

22. 村田龍宣, 他. 3 ヶ国語 (北京語、韓国語、英語) による外国人患者のための用例対訳を用いた薬剤情報提供書作成システムの開発. 日本病院薬剤師会雑誌 50 (12) : 1480-1484.
23. 小林勇樹, 他. スーパー救急における看護師の外国人患者に対して認識する問題と対応の実践. 日本精神科看護学術集会誌 57 (3) : 379-383.
24. 森田未来, 他. 異文化で生活してきた手術患者の背景を考慮した関わりについての一考察. 日本手術看護学会誌 10 (1) : 34-36.
25. 柴田優, 他. 吹田病院外国人患者受入れの現状について. 済生会吹田病院医学雑誌 20 (1) : 40-41.
26. 久保陽子, 他. 日本の病院における救急外来での外国人患者への看護の現状に関する調査. 厚生指標 61 (1) : 17-25.

【2015】

27. 井田健. IT 機器がもたらす医療最前線 医療機関で活躍する医療通訳者と医療通訳補助的役割の IT 機器 ユーザー側から見た IT 機器. 新医療 42 (7) : 124-128.
28. 上野孝生. 外国人患者のための院内インフラを考える 外国人診療に必須となる体制とシステム「通訳クラウドサービス」導入による効果. 新医療 42 (6) : 152-156.
29. 末次敏成, 他. 外国人患者への耳科手術の対応 在日外国人患者への対応と医療ツーリズム症例. 耳鼻咽喉科臨床補冊 143 : 93-98.
30. 林博道, 他. 精神科救急病棟で外国人患者とのかかわりを通して感じたスタッフの思い. 日本精神科看護学術集会誌 58 (2) : 23-27.
31. 長嶺めぐみ, 他. 多言語医療支援システムの研究開発 看護師が翻訳を必要とする臨床会話. 日本遠隔医療学会雑誌 11 (2) : 88-90.
32. 貞友隆, 他. 東広島医療センターにおける外国人患者に対する通訳活動. 広島医学 68 (7) : 374-376.
33. 野嶋太郎, 他. 日本語が通じない外国人患者への看護を振り返る. 日本精神科看護学術集会誌 58 (1) :

100-101.

【2016】

34. Kishimoto Miyako, 他. Factors complicating the diabetes management of visitors to Japan : advices from a Japanese National Center for overseas medical staff. The Journal of Medical Investigation 63 (1-2) : 15-18.
35. Willey Ian, 他. The English needs of doctors and nurses at hospitals in rural Japan. Journal of Medical English Education15 (3) : 99-104.
36. 山本健, 他. 海上保安庁ヘリコプターによる救急患者の夜間洋上搬送. 恵寿総合病院医学雑誌 4: 29-33.
37. 二見茜, 他. 外国人患者受け入れ環境整備事業拠点病院で働く看護師の外国人患者対応経験と課題の検討. 日本渡航医学会誌 9 (1) : 12-15.
38. 西崎直子, 他. 精神科医療を受ける外国人患者との信頼関係構築過程における看護師の技術. 日本精神科看護学術集会誌 59 (1) : 154-155.
39. 橋村愛, 他. 長崎市・佐世保市の看護職が考える外国人への周産期ケアコミュニケーション能力. 国際保健医療 2016; 31 (4) : 323-332.
40. 巽夕起, 佐々木 晶世, 叶谷 由佳. 日本に滞在する外国人への救急医療体制の現状と課題 外国人への救急医療に関する先行研究のレビューから. 日本健康医学会雑誌 25 (2) : 91-97.
41. 高園 藍里, 他. 慢性疾患を持つ外国人患者と家族への関わり. 日本小児腎不全学会雑誌 36: 355-357.

【2017】

42. 澤田真弓. 【新時代に備える病院のあり方】医療における言語障壁を解消する. 病院 76 (1) : 43-45.
43. 渡邊綾, 他. Listening to Foreign Patient Voices : A Narrative Approach. 福井大学医学部研究雑誌 17: 1-11.
44. 上地喜代美, 他. 亜昏迷状態を繰り返す外国人患者の退院支援 多職種協働により患者の思いを優先できた1事例. 日本精神科看護学術集会誌60 (1) : 122-123.
45. 濱井妙子, 他. 全国自治体病院対象の医療通訳者ニーズ調査. 日本公衆衛生雑誌 64 (11) : 672-683.

【2018】

46. 山田絵里, 他. 【インバウンド医療の未来像】国立大学病院での外国人患者診療と海外医療従事者研修の受入れ. 日本渡航医学会誌 11 (2) : 62-66.
47. 田口大, 他. 【救急のチームワークとヒヤリハット】当院へ腹部症状を主訴に受診した外国人傷病者の検討. 日本腹部救急医学会雑誌 38 (3) : 483-488.
48. 小林幹男, 他. 【病院が直面する「すでに起こった未来」】外国人居住者に対する医療提供のあり方. 病院 77 (4) : 310-315.
49. 近藤暁子. A 大学のアジアを中心とした留学生の医療機関受診体験について Web 調査より. お茶の水医学雑誌 66 (2) : 287-295.
50. 友田隆子, 他. 異文化看護に関する研究動向から見る日本の看護教育の課題 日本の看護のグローバル化とダイバーシティ. 看護 70 (3) : 094-097.
51. 二見茜, 他. 外国人患者受け入れ環境整備事業拠点病院におけるインバウンド患者受け入れ体制整備の検討. 日本渡航医学会誌 11 (2) : 100-102.
52. 角谷あゆみ, 他. 経済連携協定に基づく看護師候補者の国家試験誤答の傾向に関する一考察. 中京学院大学看護学部紀要 8 (1) : 69-77.
53. 戸田登美子, 他. 国際医療人材育成 甲南女子大学における国際看護教育に関する取り組み. 国際臨床医学会雑誌 2 (1) : 22-25
54. 坂本治彦. 国立国際医療研究センター病院 薬剤部における外国人患者の対応と取り組み. 東京都病院薬剤師会雑誌 67 (2) : 64-69.
55. 堀成美. 国立国際医療研究センター病院における外国人患者受け入れ体制整備. 東京都病院薬剤師会雑誌 267 (2) : 62-64.
56. 田畑知沙, 他. 日本における外国人診療の課題 大学病院における医療通訳と"言葉の先にある問題". 国際臨床医学会雑誌 2 (1) : 36-39.
57. 田中裕子, 他. 保健医療機関における外国対応の現状と課題 三重県の病院および市町保健センターを対象とした全県調査より. 日本渡航医学会誌11 (2) : 74-80.
58. 山田秀臣. 保険取得から短期間で受診した外国人患者の傾向. 国際臨床医学会雑誌 2 (1) : 40-43.